

白井喬二の面目

——大衆小説のなかのものづくり——

広岡守穂

第一節 自己実現とものづくり

第二節 ものづくりはまず大衆小説にえがかれた

第三節 時代考証

第四節 国民文学と大衆文学

第五節 ものづくりと人格の成長

第一節 自己実現とものづくり

恋愛は人間の根源的でないとなみであり、自己実現は人間の究極のいとなみである。

恋愛は文学のもっとも重要なテーマのひとつであり、文学という表現形式がおこったそもそものはじまりから、恋愛はくり返しくり返しがされてきた。それにくらべて自己実現が文学に取り入れられたのは近代になってからであ

る。なぜなら自己実現は人格の成長や完成といった概念と深く結びついており、しかも人格の成長や完成が一握りの人たちだけのものではなく、すべての人びとのものへと広がったのは、それが職業的な活動と結びついてからのことだからである。すなわち自己実現は近代に特有の問題なのである。

恋愛と並んで、古来、文学のもつとも重要なもうひとつのテーマは崇高な行為や英雄的な行為だった。勇氣、廉潔、信義、奇跡、知略、寛容などなど、武将や賢人や宗教者らの気高いおこないがえがかれてきた。産業化がはじまる以前には、人格の完成は、これらのたぐいまれな人物だけのものだった。大衆小説でいえば吉川英治が『宮本武蔵』でえがいた武蔵の求道者のな生き方がこれに当たるだろう。

これに対して、自己実現は希有な生き方に結びついた概念ではない。⁽¹⁾賢人や宗教者や王侯将相や英雄にのみ開かれたものではなく、都市の商工業者にも、農民にも、自己実現はある。自己実現ということばは、この稿のなかでおいおい定義していききたいと思うが、とにかくまず、自己実現は、主として勤勉に働くことに関係する概念だということ述べておきたい。

だれにでも自己実現はあるという考えは、一九一〇年代中ごろから二〇年代にかけて、いろいろなかたちで登場してくる。わたしの考えでは、そういう思想をもっともまとまったかたちで述べたのは、与謝野晶子である。与謝野晶子は「心的労働」と「体的労働」という一対の概念を立てて、人間はだれもが体をうごかす労働と心をうごかす労働の双方に従事するべきだと論じた。いまでいえばワーク・ライフ・バランスに通じる考え方なのであるが、与謝野晶子の特徴は、「心的労働」と「体的労働」におなじ重さの価値をあたえることによって、農民も商工民も労働者も、知識人や官僚とおなじように尊敬すべき存在なのだと考えたところにあつた。⁽²⁾

おなじ時期に民芸運動がはじまる。柳宗悦が陶芸家の河井寛次郎や濱田庄司らとともに民芸運動をはじめたのは一九二〇年代中ごろのことであった。民芸は名高い芸術家がつくる美術品ではない。安価で、日常生活に用いられ、粗末に扱われる。しかしそんな雑器にもなんともいえない美しさがある。それは日常のくらしで馴染まれるところから生まれる美である。「用の美」ともいうべき美しさである。柳が提唱した美が、与謝野晶子のいう「心的労働」に対する「体的労働」に対応することは見やすいであろう。柳宗悦はまた木喰仏の美しさを発見した人でもあった。柳宗悦が、民芸という概念を提唱し、木喰仏の美しさを強調したことの根底には、農民や商工業者のような庶民の生き方と美的感覚に対する共感が存在する。もっといえば、他者の「用」に奉仕するものづくりの意義と重要性に対する認識が存在する。

自己実現が一握りの人たちにだけ開かれたものではないという考えに、社会主義が大きな影響を与えたことはましがいない。しかし社会主義者の影響は半分だけにすぎなかった。どうしてかという点、社会主義者はおしなべて、貧しい人びとの人格の問題には無頓着だったからである。貧困が人びとの人格の成長を阻害するという考えは、労働運動の指導者たちにとっては、迂遠な思想でもあり、有害な考えでもあった。権力奪取をめざすときに、人格の完成などという主題になんの意味があるだろうか。まして自分たちが呼びかけている貧しい人びとに対して、あなたたちは貧しいがゆえに人格がゆがんでいるなどといえるわけがない。そもそも資本主義社会では、弱肉強食の風潮がはびこる。人格的にすぐれた人たちがこそ押しのけられ、日の当たらないところに追いやられているではないか、というわけである。

そこで社会主義運動の指導者たちは、歴史の法則とか階級社会の搾取といった「客観的」な思想に依拠する方向に

向かった。木下尚江が社会主義から離れたのはそういう方向を嫌ったからであつたし、賀川豊彦のように人格の成長を重んじた人物が、マルクス派やアナキスト派の指導者から激しく攻撃されなければならなかつたのもそれゆえであつた。しかも、その賀川豊彦は、阿部次郎の人格主義に強く反発していた。阿部が唱えた人格主義には、一握りの知的エリートだけに人格完成の扉を開く資格が与えられているというニュアンスがあつたからである。賀川豊彦にとって、自己実現は労働者階級にこそ開かれたものでなければならなかつた。⁽³⁾

人にはそれぞれ「良き生き方」がある。人はいろいろな能力をもち、いろいろな希望をもっている。アマルティア・センのことばでいえば、人はさまざまなケイパビリティ（潜在能力）をもっている。それを生かして、人はそれぞれに、仕事をえらび、その道に生きている。だから良き生き方はさまざまである。自己実現とはそういうことである。ところで、ケイパビリティ（潜在能力）を活用して職業につき、仕事をつうじて社会に貢献する生き方は、多様な職業が分化し、かつ世代間社会移動が高くなつて、子が親の職業を継ぐのが当たり前といった状態がなくならなにかぎり、社会のすみずみにまで広がることはない。すなわち自己実現の観念は、近代化がはじまらなければ成立しないのである。だから、自己実現は近代の産業化がはじまつたときに、ようやく文学の主題として登場することになる。たとえば、ものづくりに関連する小説として、である。⁽⁴⁾

本稿でわたしは、自己実現とものづくりのあいだに関連があることを強調したいと考えている。もちろん自己実現の道はものづくりだけではない。品物を売買したり、人を教育したり、ゴミを廃棄したりする人たちにも自己実現はある。まずこのことは、断っておこう。ものづくりには多くの人が従事しているが、その仕事は非常に多様で、おなじものづくりであっても、ある仕事に従事している人は他の仕事のことをわからない。甲冑をつくっている人には羽

織袴のつくりかたの大事なところはわからないだろう。ものづくりはしばしば高度の工夫や練達を要求するのである。熟達を要するものも、ものづくりにかぎらない。小中学校や高等学校で教えるにも、それにふさわしい知識と技能が必要である。しかし先生たちがどんな仕事をしているかは、だれにでも想像がつく。品物を売買する仕事にも、もちろん経験や知識が必要である。しかし売買ということがどういうことかは、だれにでもわかる。だが、ものづくりの専門的知識は一部の人にしかわからない。染色や塗り物の工程から旋盤の使い方で、それぞれに余人にはうかがい知れない奥深い世界がある。ものづくりには、何かしら秘密めかした雰囲気があるのである。現代社会では高度なものがづくりに対しては、その知識を保護する特許という制度があるが、そのことはものづくりが秘密めかした雰囲気を持つことを象徴的にあらわしている。

そのうえ産業革命によって、ものづくりの方法は劇的に変わった。そのことが人びとの関心をものづくりに向けた。民芸はその代表的なあらわれのひとつであろうが、これについてはあとで触れる。いずれにしても、ものづくりは多くの人が従事する活動であり、創意工夫や熟達が求められる活動である。しかもものづくりは近代という時代の特徴を照らし出すのである。

ものづくりを最初に取り上げた重要な文学者は幸田露伴である。露伴の代表的な作品である『五重塔』（一八九二年）はふたりの腕利きの大工をめぐる展開する。物語のあらすじは次のようである。

感応寺では五重塔を普請することになった。大事業であるから、感応寺では著名な大工の棟梁である川越の源太に請け負わせようと考えていた。ところが、どうしてもこの仕事を手がけたいと願う十兵衛という腕利きの大工がいた。

十兵衛はミニチュアモデルまでつくって感応寺の朗円上人のもとに持参し、この仕事はぜひ自分にさせてほしいと訴える。

源太は十兵衛といっしょに仕事をしようと思案するが、十兵衛は自分一人でやりたいのだと言って拒絶する。結局十兵衛の熱意におされて、朗円は思案の末、十兵衛にまかせることにした。

十兵衛のつくった五重塔は見事なものだった。落成式の前夜、大嵐がやってきた。寺のものは恐れあわてて十兵衛のところへ駆けつけてくるが、十兵衛はびくともするものかとまったく動じなかった。五重塔は小揺るぎもなかった。

だいたい以上のようなあらすじである。

十兵衛という人物の性格設定において芸術至上主義というテーマにギリギリまで接近しているが、『五重塔』の主題は芸術至上主義ではない。おなじようなテーマで連想するのが芥川龍之介の『地獄変』であるが、『地獄変』に登場する絵師の良秀は、地獄絵図をえがきたいばかりに娘が火災の中で身悶えているのを眉ひとつ動かさずに写生する。尋常の人間ではない。それにくらべれば『五重塔』はずっと世俗的な物語である。十兵衛は仕事のために妻子を捨てたり、見殺しにしたりするタイプではない。十兵衛はただ、精魂こめて普請をしたのである。

なにより『五重塔』はものづくりの世界をえがいた小説である。物語の筋道のなかでもな登場人物が優先するのは五重塔の普請という事業をなしとげることである。源太は自分の不満も周囲の人びとの不平もおさえるだけの度量の持ち主である。源太は十兵衛に仕事を譲り、そして十兵衛が思うさま力を振るえるように心をくだいた。朗円上人も同様である。こうしておもな登場人物の誰もが、たとえ表面では対立していても、暗黙のうちに、深いところにお

いて事業達成という共通の目的で結びついているのである。

しかしながら『五重塔』はやはり例外的な小説であるといわざるをえない。明治大正をつうじて、登場人物の仕事の内容にまでたちいつて描写した小説は無に等しい。近代日本文学において最初に隆盛を誇ったのは硯友社であり次に自然主義だったが、いずれものづくりとは縁のない世界をえがいた。硯友社の総帥・尾崎紅葉の作でたいへんな評判になった『金色夜叉』では、主人公の間貫一はお宮との恋に破れた末に高利貸しになる。小説のなかで、高利貸しが毛嫌いされていることはしきりにえがかれるが、寛一が貸金業者として日々どんな活動に従事しているかは少しもえがかれぬ。紅葉門下の柳川春葉が書いた『生さぬ仲』は、『金色夜叉』をしのぐ人気になった。主人公の夫は会社社長であるが、彼は人柄は良いのだけれど、社長としてはまるで無能である。会社が破産したばかりか、彼自身詐欺の嫌疑で投獄される始末である。小説のなかで、仕事をしている場面はまったくえがかれていない。せいぜい金策に駆け回る姿がちよっとえがかれていくくらいである。『金色夜叉』や『生さぬ仲』とくらべるとはつきりわかるように、『五重塔』は注目すべき作品なのである。

一八九二年に『五重塔』が書かれたあと、ものづくりや自己実現の文学はしばらく途切れた。一九二〇年に、武者小路実篤の『友情』が発表されるが、そのあと自己実現がふたたび文学の世界に姿をあらわすのは、一九三〇年代後半以後のことである。一九三七年、島木健作が『生活の探求』を書き、四二年には、宇野千代が聞き書きの手法で『人形師天狗屋久吉』を書いた。舟橋聖一が四一年から書きはじめた『悉皆屋康吉』を完成したのは四五五年のことだった。とくに『悉皆屋康吉』は康吉の心の中に入って、康吉の仕事への打ち込み方を綿密にえがいたことで、注目すべき作

品である。悉皆屋というのは呉服のディレクターのような仕事である。客の注文に応じて染物屋に指示したり、呉服に関するあれこれを差配する仕事である。康吉は仕事熱心で、色柄や風合いをひとつひとつ覚えていき、いつしかだれからも一目置かれる存在になっていくのである。

このようにみてみると、文学者たちの目が自己実現に向かったのは、日中戦争が全面化して戦時色が濃くなってからのことだという印象がある。島木健作の『生活の探求』が刊行された一九三七年には、七月に盧溝橋事件がおこり日中全面戦争がはじまった。戦前の経済活動のピークはこのころだった。しかし日中戦争がはじまってから、増大する軍事費の圧迫で経済統制はすすみ、生活は日を追って逼迫していった。新聞の紙面には連日のように戦意をかきたてる文字が躍った。奢侈や華美や享楽を排撃する運動がおこなわれた。そしてこの頃から、言論統制は格段に厳しくなっていく。もちろん統制は文学にもおよび、事実上の執筆禁止に追い込まれた作家も一人や二人ではなかった。そういう時世のなかで、文学者は自己実現に目を向けるようになったのである。

『生活の探求』を書いた島木健作は転向作家といわれる。たしかに島木健作は一九三四年に処女作『癩』を発表して以来、『盲目』『再建』と、執拗に転向問題を追及してきた。しかし共産党運動からの脱落という視点から島木をとらえるのではなく、人間の良き生き方の多様性を認めるといふ視点からみると、農民の知恵にたいする敬意を前面に打ち出した『生活の探求』は、中野重治につうじるといふより、宇野千代や舟橋聖一につうじる道のほうが太いとみることもできる。わたしはそう考えたい。打ち明けていえば、わたしは、島木の文学には、おなじころ大河内一男や風早八十二がとなえた生産力理論につうじるものがあると主張したい誘惑に駆られるのである。書くことの範囲が制限され、しかも国民がこぞって出征兵士の「尽忠報国」に声援を送っているとき、人間にとって本当に重要なのは

国家への自己犠牲ではないということを訴えたとしたら、ひとりひとりの真摯な自己実現の姿を丹念にえがくことが残された唯一の方法だったのではないだろうか。同様に、生産力理論もまた、生産力としてのひとりひとりの状況に焦点を当てようとする理論であった。戦争遂行のためには、かぎられた生産要素を最大限効果的に編成するシステムをつくらなければならない。そのためには生産をやみくもに軍事に集中してはだめで、生産力を高めるための社会政策が必要だというわけである。残念ながら生産力理論の検討は本稿のテーマではない。まずさしあたり、島木健作や舟橋聖一のように、農民や職人のなかに踏み込んでいく作家の視点というものに注目しておきたいのである。

第二節 ものづくりはまず大衆小説にえがかれた

いましてたものづくりを最初にとりあげたのは幸田露伴の『五重塔』だったと書いたばかりだが、実を言うとそのように文学史を書くのは正しくない。それが当てはまるのはせいぜい純文学だけのことであって、大衆文学を度外視しているからである。大衆文学、さらには明治一〇年代から盛んに書かれた政治小説をみると、『五重塔』より早くものづくりを取り上げた文学作品が存在することに気づくだろう。

矢野龍溪の『浮城物語』はものづくりの文学の嚆矢として忘れてはならない。『浮城物語』は『五重塔』が書かれる二年前に、『郵便報知新聞』に連載された。『浮城物語』は冒険科学小説であり、おりからの南進論の時流にのったものであるが、この中で矢野は科学技術とものづくりの重要性に対してさかんに読者の注意を惹こうとしている。福沢諭吉の高弟であり、立憲改進黨の幹部でもあった矢野龍溪は、『経国美談』で民権をはることが国権の伸張になる

という、いわば「民主帝国」のありようを、古代ギリシア史に舞台をかりてえがき出し、『浮城物語』では富国強兵の基礎は科学技術とものづくりであることを空想科学小説のかたちで主張した。のち一九〇二年に、矢野は『新社会』を書いて、未来のユートピアのありさまをえがくことになる。矢野は文学の使命と効用を、近代国民国家の建設に向けて読者の知見を高めるところに求めていた。『経国美談』『浮城物語』『新社会』は、矢野のそういう考えの結晶である。

矢野が経営した『郵便報知新聞』では、矢野に見いだされた村井弦斎などが、文明開化と立身出世を宣揚する小説をしきりに書いた。村井弦斎の『小猫』（『郵便報知新聞』一八九一年～一八九二年）は、房州の漁師の子である坂田金太郎少年が、星雲の志をたてて東京に出、そこで数々の有力者の警咳に接して器量の大きな人物に成長していくという物語である。そして金太郎はアメリカに渡って大漁業会社をおこす。金太郎を慕う雪子は富豪の娘だが、実力者のもとに嫁すよりは、金太郎とふたりでつくる将来に賭けたいと、親のすすめる結婚を頑なに拒否する。そして金太郎を追ってアメリカに渡り、立派な看護師になる。お互いに功成り名遂げたあとに、ふたりは晴れて華燭の典を挙げるのである。

おなじ村井弦斎の『食道楽』は、住宅の設計に留意すべき点を述べたり、西洋料理のレシピを書き連ねたり、パランスのよい栄養を摂取するために栄養価に富む食品を紹介したりと、さかんに文明開化の生活的諸相についての議論を並べている。物語展開は至極単純なのであるが、弦斎の狙いは、文明開化をすすめるため、西洋わたりの新知識を読者に伝えるところにあった。

ここで、これまで述べてきたことを整理しておこう。ものづくりが文学に取り上げられるとき、その取り上げられ

方は、二通りだった。第一は、富国強兵・文明開化の欠くべからざる構成要素として政治小説およびその系譜にたつ新聞小説に取り上げられたことである。矢野龍溪の『浮城物語』がその代表格である。第二は、特異な才能をもつ人物が、ものづくりりに打ち込むときの尋常でない姿が、純文学に取り上げられたことである。芥川龍之介は好んでそういう人物を取り上げた。たとえば『戯作三昧』で芥川は滝沢馬琴の鬼気迫る創作態度をえがいている。『地獄変』に登場する絵師・良秀は、そのようにしてつくられた人物造型の典型であろう。幸田露伴の『五重塔』にも、そういう性格がある。

だが以上のふたつとは別に、第三の流れがある。それは、一九二〇年代以後、大衆小説にえがかれたものづくりである。いまあげた第一第二のものづくりは、いずれも一握りの選ばれた人たちのものづくりである。近代科学をおさめたか、大学を出たか、特異な天才にめぐまれたか、といった人びとによるものづくりである。だが大衆文学にえがかれたものづくりは、至極普通の人たちのものづくりなのである。『五重塔』はいわゆる純文学に属する作品であり第二の流れのはじめに位置するのであるが、同時にこの第三の流れの草分けでもあった。のっそり十兵衛は腕の確かな大工ではあるが、偏屈な頑固者であり普通の人でもある。芥川龍之介がえがいた滝沢馬琴や絵師・良秀のような特異な性格をもつ天才ではない。

そのようなものづくりの世界を小説にえがいた作家として、注目しなげなければならないのは白井喬二である。一九二〇年、『怪建築十二段返し』でデビューした白井の小説には、デビュー作自体が建築設計を軸にした物語だったように、ものづくりをあつかった作品が非常に多い。とはいえ『怪建築十二段返し』は伝奇小説であって、建築設

計のことは物語展開の一要素をなしているにすぎない。『怪建築十二段返し』は博文館の『講談雜誌』に発表された。つまりそもそも白井喬二は、いわゆる書き講談から出発した作家であって、登場人物の内面世界をえがくといった純文学的なテーマには無関心だった。デビューしたころの白井喬二はもっぱら伝奇小説を書いており、そのころの代表作ともいべきものが『神変異越草子』である。こちらは幻術使いの物語である。

白井喬二の作品を読んでいると、珍奇な職業がしきりに登場するし、かならずといっていいほど登場人物の生業についての記述がみられる。こころみに学芸書林刊『白井喬二全集・第九卷』を開いてみると、屋敷の門をこしらえる門大工の話（遠雷門工事）、彫刻師の話（神体師弟彫）、笛づくりをしてる男が名笛を鑑定する話（本朝名笛伝）、屋根瓦づくりの話（瓦義談）などなど、ものづくりにまつわるものばかりである。といっても、どれもこれも向上心や修行や鍛錬とは縁のない物語ばかりなのだが、白井喬二は門づくりにせよ笛づくりにせよ瓦づくりにせよ、ものづくりについての講釈をひとしきり並べて、ものをこしらえることが奥深い玄妙な術であることをきわだたせる。そのうえで伝奇的な物語を展開するのだから、ものづくりは彼にとって、伝奇ロマンに必須の要素になっているのである。

おもしろいのは『盤嶽の一生』のように、人間不信や社会批判をただよわせた、白井喬二のものとしては異例の作品においても、登場人物の生業に目を向けていることである。『盤嶽の一生』は、主人公の阿地川盤三（盤嶽）が何で生計を立てているかをあかす場面からはじまる。阿地川盤三は下級武士の出だが、いまは貧しい浪人暮らしである。どうして収入をえているのかというと、なんと樹木の接ぎ木によって生計をたてている。盤三は、殿様がつくった水道樋が、通過する村の人たちの生活を脅かすからといって、壊すだの守るだのといった争いに巻き込まれる。これが

物語の発端である。そのあげくに盤三は、心ならずも放浪の旅に身をおくことになる。そしてさつそく、どうしたら路銀をえることができるか、心配しなければならなくなる。

このころ時代物を書いていた他の作家たちは、武士が何によって生活していたかなどということには関心をしめさなかつた。白井喬二はそうではない。そればかりか白井喬二だけは例外的に、実にさまざまな職業を登場させているのである。接ぎ木でくらしをたてている武士とは、いい加減なつくり話かもしれない。しかしものづくりに対する白井喬二の強烈な関心には、つくづく驚くのである。

『新撰組』は一九二四年五月から一年半にわたって『サンデー毎日』に連載された。『サンデー毎日』は一九二二年に創刊されたが、白井の『新撰組』によって同誌の売り上げは大きく伸び、それによって小説を巻頭におくという『サンデー毎日』の編集方針が定まったといわれる。⁽⁵⁾新撰組といえば近藤勇や土方歳三の名が思い浮かぶが、この物語では近藤も土方も脇役である。白井の『新撰組』の主題は但馬織之助の恋物語である。但馬織之助は名のある職人が大勢住んだことがあるという長屋に住んでいる。武士ではない。どういう人物かという点、なんと独楽づくりの名人である。ちゃきちゃきの江戸っ子である。というわけで、白井喬二が取り上げたのは、今度は独楽づくりである。白井は例によって、綿密な考証をほどこして、独楽づくりという仕事をいかにも特異なものに仕立ててしまう。そして物語の山場に、チャンバラの場面ではなく、恋の成否をかけた独楽試合の場面をもってくるのである。

代表作の『富士に立つ影』は築城術をめぐる争いの物語である。『富士に立つ影』は、一九二四年、『報知新聞』で連載がはじまった。この小説は、築城術をめぐる争いにはじまり、三代にわたる確執をえがいた。時代は、文化文政

期から明治の開化期まで七〇年に及ぶ。物語のはじめの部分に、赤針流熊木伯典と賛四流佐藤菊太郎というふたりの築城家が藩主の前でプレゼンテーションする場面が出てくる。ふたりがうんちくを傾けて滔々と築城プランを語る場面は圧巻である。『富士に立つ影』は中里介山の『大菩薩峠』とならぶ一大巨編になった。この二作と、少し後にでた吉川英治の『宮本武蔵』の三作が、戦前における代表的な大衆小説の巨編となった。

『金襴戦』は木曾の山奥の村の金襴織りをめぐる、ふたつの村の騒動の物語である。『金襴戦』は薬種商の箕屋専蔵が蟬の抜け殻を取りに飛騨の畑佐村へ出かけ、そこで一月以上滞在するうちに、金襴織りをめぐる騒動に巻き込まれるという物語である。専蔵は蟬の抜け殻取りの名人ということになっていて、なんのことかと思われるだろうが、蟬の抜け殻は蟬退といって、実際に漢方薬につかわれている。白井喬二はそこから蟬の抜け殻取りの名人などという実在したかどうかかわからないような職業をつくりだすのである。金襴織りは畑佐村にとって大事な産業だが、金襴織りの鉦汁（かなじり）で川下にある笠田村の畑のものがまったく取れなくなってしまった。いま流に言えば公害問題である。そこで笠田村の有志の衆が金襴織りの織元である岩本吾平のところに行き、はじめ専蔵は傍観者で、話を回す役目だったが、じょじょに両村の騒動に巻き込まれていく。そして物語の最後に思わぬどんでん返し専蔵を待ち受けているのであった。

さて物語のなかに、経木の神様といわれる滝兵衛という男が、経木による産業振興を熱っぽく語る場面がある。滝兵衛は経木づくりによって村が豊かになると信じ、それゆえに経木づくりの奥義を惜しげもなく村人に伝授している。飄々とした軽いタッチで描写しながら、ものづくりにいそしむ人への敬意が軽くにじみでているくだりである。滝兵衛のような人物を登場させるところが、白井喬二の白井喬二たるゆえんである。

ところで、白井がとりあげたものづくりの世界はどこまで事実にもとづいているのであろうか。『新撰組』には生独楽という特別な独楽が出てくるが、それを使って占えば必ずびたりと当たるなどというのは伝奇ロマンをおもしろくするつくりごとだとわかる。それなら独楽づくりには江戸の流儀と京都の流儀があったなどというのは本当だろうか。こうなると虚実の判別にはわかにはつかなくなる。

大衆小説の時代考証がでたらめではないかということは、一九三〇年代ごろにはときどき問題になっていた。猿飛佐助だの天保六花撰だのといったヒーローは、講釈師たちが空想をたくましくしてつくりあげたことはあきらかだったから、人びとはそれを承知で楽しんでいた。大衆小説は書き講談からはじまったのであるし、机竜之介（『大菩薩峠』）や丹下左膳（『新版大岡政談』など）や法月弦之丞（『鳴門秘帖』）のようなヒーローが破天荒な空想の産物でなかったはずがない。しかしそうはいつでも、『大菩薩峠』や『新版大岡政談』や『鳴門秘帖』にえがかれる時代背景は、どこまで事実として信頼できるのだろうか。

考証がしっかりしていると評判だったのが直木三十五である。直木三十五は大衆小説はただおもしろければいいというものではない、リアリズムがなければならぬと考えていた。代表作の『南国太平記』（一九三二年）には兵道なる呪術が登場するが、これはつくりごとではない。兵道は島津家ばかりでなく、九州の大名家にひろく伝わっていたものらしい。ただし『南国太平記』では、島津斉彬やその子が兵道によって呪い殺されたことになっているが、もちろんこれはお話である。直木の登場で、大衆小説は歴史小説に近づいていった。だがその直木にしても、考証はいい加減だという人もいた。

考証の問題を取り上げて、名だたる大衆小説作家をなで切りにしたのが、一九三三年に出た三田村鳶魚の『大衆文芸評判記』であった。三田村鳶魚はそのなかで、大衆小説の登場人物が、言葉づかいや身なりにおいても、思考様式や行動においても、つまり肝心な部分がでたらめだとはげしく批判した。白井喬二の『富士に立つ影』も狙上によせられ、ボロクソにけなされている。

ただし白井のために弁じておけば、『富士に立つ影』の構想を準備するにあたって、白井は築城術について調べ、数多くの築城家から赤針流熊木伯典と賛四流佐藤菊太郎のふたりをえらんだ。白井は自伝のなかで「古い築城師名鑑の中から二名を拉しきたって筋とした。徳川十五代記に富士山麓に訓練城を築くという予定のくだりがあったのでそれを活かした」と回想している。⁽⁶⁾そして連載がはじまるとすぐに、賛四流の子孫から連絡があったという。連載終了後には、赤針流の子孫からも連絡があった。⁽⁷⁾

築城術は戦国時代に発達した。有力な大名は皆、築城の名手だったが、そのころに築城術という秘伝があったわけではない。築城術が軍学のなかに位置づけられたのは江戸時代になってからのことであった。『富士に立つ影』で熊木伯典と佐藤菊太郎は、「地取り」や「なわばり」つまり城の立地や設計について迫力ある議論を展開する。しかし江戸時代には新たに城をつくることは禁じられていたから、ふたりの詳細なプレゼンテーションはいわば机上論だったわけである。それはともかく、白井喬二は小幡勘兵衛の『甲陽軍艦末書抄』や山鹿素行の『武教全書』はじめ、あるいは『城事記』などの古書をつぶさに調べたのであろう。

さて、三田村鳶魚に戻る。筆法鋭くこきおろされたのだから、それをきっかけに考証にこころを砕く作家もあらわれたが、大方は三田村鳶魚を毛嫌いした。しかし鳶魚の影響かどうかはともかくとして、一九三〇年代には、大衆作

家の歴史的事実への関心も格段に深くなる。歴史的事実を歴史的事実として所与のものとし、それをつくった人間たちの性格を造型することに心血を注ぎ、彼らの衝突と協調のダイナミズムにせまろうとする本格的な試みがあらわれた。長谷川伸や海音寺潮五郎や子母沢寛の史伝ものがそれにあたる。

第三節 時代考証

時代考証とは何であったか。まずわたしは、長谷川伸らが紡ぎ出した物語の展開のなかに、かれら自身が抱懐していた歴史過程のイメージを見いだすことができることを指摘しておかなければならない。たとえば長谷川伸の『荒木又右衛門』には、旗本と大名の面子をかけた攻防がえがかれ、ついに鍵屋が辻の仇討ちが成就する場面がえがかれる。たいていの仇討ちものならそこで終幕であろう。たとえば渡辺霞亭の『荒木又右衛門』は鍵屋が辻の決闘で終わって、その後日談は全集版でたった一行で片づけられている。⁽⁸⁾ところが長谷川伸の物語は鍵屋の辻で終わらないのである。この仇討ちをどのように裁くかが、幕府にとっては頭の痛い問題であったとして、長谷川は落としどころをさがして動く武士たちの様子を丁寧⁽⁹⁾にえがいていく。結局、物語は大久保彦左衛門が出てきて見事な裁きをつけるところまですすみ、それを見届けて大団円をむかえるのである。

『荒木又右衛門』は一九三六年一〇月から翌年六月まで、『都新聞』に連載された。物語の展開過程は、それが書かれた当時の政治過程を思いおこさせる。すなわち一九三〇年代の政治状況を見ると、軍や内務省や政党や民間右翼などなど、組織間のチキンレースのような争いが頻繁に繰り広げられていて、いったん問題がおこると容易におさまり

がつかなかった。一九三〇年のロンドン海軍軍縮条約調印の政治過程がまさしくそうだったし、三年に大阪の天六交差点でおこったゴーストアップ事件なども、組織エゴの対立を象徴する事件だった。

一九三一年に満州事変が勃発し、軍部の暴走がはじまった。事変は一气呵成に満州国建国にいたる。事変がおこるとマスコミはいっせいに軍部支持に回り、愛国心を煽られた国民は歓呼の声をもってこれを支持した。しかし政治過程が統御不可能になっているのではないかという危惧は漠然としてであれ多くの人が抱いていた。満州事変そのものが関東軍と陸軍中央と政府と、それぞれ政策が対立していて、関東軍が陸軍中央と政府の意向を無視しておこした事件だった。国民はそれを知らされていないが、組織間へのつびきならぬ対立があるのではないかという懸念は広がっていた。三六年二月には二二六事件がおこり、それが最悪のかたちで現実のものになった。そしてその後になると、陸軍は組織として公然と政治に容喙するようになる。吉野孝雄は日中戦争がはじまったころのこととして、陸海軍の関係が険悪だという噂がしきりにささやかれていたと回想し、「なかにはいざ陸軍と海軍が内戦を始めるというものまで現れた。後の東条内閣の時代になると、連合艦隊司令長官の山本五十六が上陸したときには陸軍憲兵の尾行が付くという噂まで立った。事実、山本自身もそのようなことを口にしていたという証言もある」と述べている。⁽⁹⁾

長谷川伸は一九三五年頃にはトップクラスの流行作家だったが、彼はあえて地味な考証に踏み込み、とても大衆受けしそうなない叙述スタイルで『荒木又右衛門』を書きすすめた。大名と旗本の緊迫した意地の張り合いを詳細にえがいたうえに、鍵屋が辻の決闘の場面で筆をおかず、大久保彦左衛門の裁定がおりる場面にまで引つ張ったことには、彼の時局への不安が働いたのではないかと思わせる。当時は要人がひんばんに暗殺され、戦争がはじまり、クーデタ

未遂事件までがくり返しおこった。事件がおこるたびに人びとは固唾をのんでこの推移を見守りながら、最後には、四方ににらみがきく大物が登場して決着をつけてくれることを望んでいた。たとえば元老がその役割を果たすべく登場するだろうと期待した。現実の歴史からひとつ例を引けば、一九三七年六月の、近衛内閣の登場は、まさしくそういう国民の輿望をになつてのことだった。長谷川伸が『荒木又右衛門』の叙述を大久保彦左衛門の裁定がおきる場面にまで引つ張つたのは、そのような待望論のあらわれであるといわなければならない。『荒木又右衛門』の連載が終わつたのは、奇しくも一九三七年六月のことだった。

もうひとつ直木三十五の『南国太平記』も、政治過程への彼なりの期待を込めて書かれたものとみてよい。『南国太平記』は一九三〇年六月から翌年一〇月まで『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に連載された。幕末薩摩藩のお由羅騒動をえがいた小説である。藩主の座をめぐる暗闘であるが、直木はお由羅派と斉彬派の対立を上級武士と下級武士の対立に交錯させてリアルにえがいて評判になった。おもしろいのは斉彬が裏で久光と連携しているものとして物語をすすめているところである。斉彬は、自分が倒れたら、久光が自分のこころざしをひきついでくれる。われわれは一薩摩藩のことだけをみてはならない、天下国家の将来をみすえて行動しなければいけないと腹心の家来たちに語る。島津斉彬の識見の高さをえがいたくだりである。ここには最高レベルのリーダーシップにたいする作者自身の期待を込めるとみてよい。

物語は斉彬の遺志をついで、益満休之助や西郷隆盛や大久保利通らの若者が倒幕に立ち上がるところで終わっている。物語が主張しているのは、どんな激しい対立や闘争があろうとも、対外的危機を前にしては団結しなければなら

ない、そういう団結を導くのはすぐれたリーダーシップだということである。ここでも傑出した人物への期待が語られている。『南国太平記』の連載がはじまった一九三六年は、四月にロンドン海軍軍縮条約が結ばれ、それに対して統帥権干犯問題がおこった。一月には浜口首相が東京駅頭で狙撃されている。翌年九月に満州事変がはじまり、一〇月にクーデタ未遂事件（一〇月事件）がおこった。直木は『南国太平記』を書いていたころから少壮軍人とのつきあいがはじまり、反議会主義と英雄待望論を語るようになる。¹⁰三二年一月には新聞紙上に「ファシズム宣言」を発表したり、時局小説のはしりである『太平洋戦争』『日本の戦慄』を発表したりした。これを考え合わせると直木は、どうやら益満休之助や西郷隆盛や大久保利通らに昭和の青年将校たちを重ね合わせていたらしいと思われる。日中戦争という「対外的危機」を前にして、青年将校の行動力を核として国民は団結しなければならないといったところであらうか。

たとえ歴史的事実を前提にしたところで、登場人物をうごかす価値観や人間関係の基本的な力学が共有されていないければ、読者は納得しない。だから作者の認識が読者の認識と共通していないと大衆小説は読まれないだろう。物語に登場する武士たちの行動が、自分たちの価値観に合致していなければ、読者は感情移入できない。そのことは一九四〇年代五〇年代に書かれた山本周五郎の小説と、一九八〇年代九〇年代に書かれた藤沢周平の小説を比較するだけでも一目瞭然である。山本周五郎の小説に登場する武士たちがお家のために自分が犠牲になることを厭わないのは、そのころの読者たちが滅私奉公の観念に生きようとしていたからであるし、藤沢周平の武士たちが自分の妻子のために行動するのは、マイホーム主義の観念が広く行き渡ったからである。そしてそこから先が問題なのだが、はた

して現代の作者と読者に共有される認識が、実際に過去の武士たちの価値観や行動様式に合致しているかどうかは保証の限りではないのである。⁽¹¹⁾

とはいえ、わたしが白井喬二について注目したいのは、ちょうどこれと反対の事柄である。ものづくりの世界をえがくことは、そもそもそれが歴史的事実に合致するかどうかということとは別に、読者に対してものづくりそのものについての関心をうながすであろう。いや、ただうながすばかりでなく、日頃からものづくりの世界で仕事をしている大勢の読者が存在したのだということである。そのことをわたしは言いたいのである。

一九二九年、白井喬二の編集による『国史挿話全集』全一〇巻が、萬里閣書房から出ている。⁽¹²⁾ 白井は国史のエピソード蒐集に並々ならぬ関心を寄せていた。「日本歴史の再検討というか、われわれが歴史とと思っている表街道の歴史ではなく、党派党閥の圧力のかかっていない裏街道の歴史、即ち日本人の素顔を知るための文献、これが本当の歴史ではあるまいか」⁽¹³⁾と考えていたからである。もともと『国史挿話全集』は白井の発案になるもので、そもそも当初は出版の目当てもなかった。とにかく編纂して原稿だけでも後世に残せばいいというつもりだった。ところが白井の考えを知って、萬里閣がぜひともうちで出版させてもらいたいと申し出てきた。白井はその申し出を受けた。白井は全国の知事に手紙を出して協力を依頼した。すると多くの資料が届いた。後年白井は、そのときのことを回想して、「日本の古典や古文書をあさってその中から挿話にあたる箇所を抜粋するのだから資料を読むだけでも大変である」⁽¹⁴⁾と述べている。『国史挿話全集』には、巨匠編、逸話編、畸人編といった巻があるが、それを開いても築城術や門づくりや独楽づくりの話は見当たらない。しかし収録されたおびただしいエピソードを眺めると、白井が歴史のななか

らつかみ出そうとしていたものの姿がぼんやりと浮かび上がってくる。

白井は祖父が所蔵していた『日本字引』という書物のなかに「小説とは文字で綴る学問なり」ということばをみつけ、たいへん気に入っていた。⁽¹⁵⁾ 自伝にはその意味を詳しく説明した下りはないが、要するに歴史的事実を背景にすえて、その上に伝奇ロマンを繰り広げたということである。『富士に立つ影』の執筆について、「古い築城師名鑑の中から二名を拉しきたって筋とした。徳川十五代記に富士山麓に訓練城を築くという予定のくだりがあったのでそれを活かした⁽¹⁶⁾」というのは、まさしく「小説とは文字で綴る学問なり」の一半だったであろう。

白井のこのような関心は、『明治事物起原』を書いた石井研堂に照応するものがある。『明治事物起原』は、産業考古学のはしりともいえるべき書物で、日本最初のマッチ工場はいつだれがつくったかとか、日本最初のデパートはいつ開業したかといったことが、これでもかこれでもかと並べられている。『明治事物起原』は一九〇八年に初版が出て、石井研堂はそのあと増補を繰り返した。石井研堂は吉野作造が主催する明治文化研究会にも参加しているが、急速に変貌する明治社会の、その変貌の様相を、だれがどんな事業をおこし、いつどんな職業がはじまったかといった具体の次元にまでおとりて、詳細に記録しておこうとした。

石井が明治の変容に注目したのに対して、白井は明治以前に、人びとが従事していた事業や仕事に関心を寄せた。それらの多くは白井が小説を書きはじめた一九二〇年代には、すでに姿を消したのか、または姿を消そうとしているものである。石井研堂と白井喬二は、産業構造の変動がもたらす人びとのくらしの変化に対して、いわば対をなす関係にある。笛づくりひとつとっても、そこには玄妙な工夫がほどこされている。常人の想像もつかないような、苦

労と創意が込められている。それは明治になってマッチ工場をおこそうとした技術者の創意工夫と本質的におなじ性質の努力であるといふべきだろう。

石井にせよ白井にせよ、明治以後の産業化の歴史過程に身をおいていなかったら、ものづくりに対するそこまで強い関心がおこったかどうかはあやしい。はっきりいえば、産業化そのものが、彼らにそのような関心をひきおこしたのである。白井は築城や門づくりや独楽づくりを、それを極めれば摩訶不思議な現象をひきおこす玄妙な技として伝奇ロマンを書いた。築城という仕事に対する敬意、門づくりに対する敬意、独楽づくりに対する敬意がそこにはある。そういう敬意が白井喬二の胸に宿るのは、産業化という過程の進行を自分の目で目撃しているからである。昔からさまざまな人がものをつくってきた。それは形ある物にはかぎらない。有形無形のを、人びとは創意工夫をこらし試行錯誤しながらつくりだしてきた。それはふつうの人びとの、ひたむきな営為の産物なのである。そして、ここまですれば、そこから人びとの自己実現に注目するまでの距離はいくらもないであろう。

第四節 国民文学と大衆文学

もうひとつ白井が何を考えていたかをうかがわせるエピソードがある。一九五八年、白井は乞われて東京作家クラブの会長になった。会長になった白井が最初に手がけたのが「交通安全作家画家肉筆展覧会」というもので、肉筆の作品を販売して交通安全のためのチャリティとした。花いっぱい運動もおこなった。そして一九六二年、白井喬二は東京作家クラブの委員会にはかって、文化芸術界のかくれた人材を表彰する文化人間賞を新設した。文化人間賞の最

初の受賞者は日本画家の奥村林暁で、奥村は京都の織物業「たつむら」の社員として、「たつむら」を世界的な企業に押し上げた立役者だった。第二回受賞者は『西日本新聞』学芸部長の黒田静男だった。黒田は雑誌『九州文学』を立て直し、幾多の作家を世に送り出した。第三回は歌舞伎役者の実川延童だった。実川延童は当時六九歳の老優で名は知られていなかったが、歌舞伎の生き字引ともいべき存在だった。¹⁷『国史挿話全集』や『日本逸話大辞典』を編纂したことと、そして人間文化賞を提案したこと、これらを白井喬二の文学とかさねあわせると、白井が考えていたことの方がかなりはつきりするだろう。

白井は大衆文学ということばの提唱者であり、先頭に立って大衆文学を引っばってきた。白井のいう大衆文学は、ストーリー性があつて、読書人ばかりでなく広く大衆的規模で読者に支持される文学というくらいの意味であつた。やがて一九三〇年代になって、国家による文学統制が強まる。それは一部の官僚と文学者のうごきからはじまった。一九三四年に文芸懇話会が設立された。これは内務省警保局長の松本学が菊池寛や吉川英治にはかつて設立したもので、島崎藤村、徳田秋声らの大御所をかつぎ、大衆文学からは吉川英治、白井喬二らが参加していた。文芸懇話会はもともと直木三十五と松本学あたりから出た構想で、直木の名前がないのは一ヶ月ほど前に死去していたからである。ちなみに松本は一九三四年に警保局長を辞任するが、やがて「邦人一如」をとなえて、「皇道主義による世界家族主義の実現」をかかげる邦人社を設立することになる。

そういうなかで国民文学の叫びがおこると、白井もまた、白井流の国民文学をとなえるようになる。日米開戦を約半年後にひかえた一九四一年、『大衆文芸』に、白井は「正道大衆文学論」と題するかなり長い評論を書き、近年に

わかには叫ばれはじめた国民文学論と、自己が以前から唱えてきた大衆文学論との違いを力説している。大衆文学を国民文学と言いつ直すと、白井が考えていた歴史や国民の具体像が浮かび上がってくるだろう。一般に国民文学論という戦争協力と切っても切れないつながりがあるし、白井喬二も、一九三八年に、陸軍に従軍して中国戦線の視察をおこない、帰国後『従軍作家より国民に捧ぐ』という従軍記を平凡社から出している。大政翼賛会の評議員にもなっているし、日米開戦の翌年に日本文学報国会が結成されると小説部会の幹事長になっている。とはいえ大衆小説作家は軒並み戦争に協力したから、それは白井だけのことではない。いずれにしても、白井の国民文学論を、時局面からだけ位置づけるのは適切ではない。

白井はつとに大衆文学の理論的な提唱者であり、国民を歴史の深い理解にいざなうことを大衆文学の目的と考えていた。ただし白井のいう歴史は政治史のことではなかった。政治史は支配者が書いた歴史であり、勝者自身による正当化がほどこされている。それは偽史である、と白井は考えていた。白井は「古書の中で（史）を表題としている本」と言うものは極端に言えばほとんど捏造したものだとみられている。これは何故かと言えば、そうした文書は大部分、時の権力者に支配されて、権力者にとっては都合のよいことばかりを書き立てているものが多く、結局この史を使用している本は、一方に都合のよい事実をかきためた本だと裏書きされているのと同じことである。それとは反対に（志）と表題にある書籍には、ヤヤ真実を伝えられているものが多い」と書いて⁽¹⁸⁾いる。

国民文学論は、日中戦争前後から日本浪漫派の浅野晃らによって提唱された。提唱者のひとりであった浅野晃の論をみると、浅野は日本文学における「タイプ」の不在を嘆いている。日本文学は国民が真に自己を投影できる主人公を造形できていない。本当に生き生きとした感動を得るのは鷗外や漱石ではなく、ツルゲーネフやプーシキンだとい

うのである。一八九七年、ツルゲーネフの『ルージン』が二葉亭四迷によって『うき草』として翻訳されて話題になり、新聞小説でもルージンを模した人物がえがかれて好評を博したことがあった。⁽¹⁹⁾ 浅野の念頭には、そういう事実がおかれていた。

これに対して、白井が考えていた「国民」は、歴史と文化によって統合され、「タイプ」によって象徴されるような運命共同体というよりも、ひとりひとりが精魂込めてものづくりに従事している、そういう人たちの集合体なのである。どの時代にも、さまざまなものづくりがあり、それに従事している人たちがいる。その人たちは人知れず苦勞して、ものづくりの業をきわめようとしている。だれもが生業を持っていて、それぞれに奥深い世界がある。そういう人たちの集合が国民である。そのすべてを知悉することはとてもできない。しかし、そういう生業がお互いに連関し合って社会は成り立っているのであるし、それによって国民という集合ができていてる姿を想像することはできる。そういう姿に思いを馳せさせること、それが国民文学の役割であった。白井の国民文学論は、そういう認識の上に立っているのである。

第五節 ものづくりと人格の成長

さて、時計の針を少し戻そう。人格の完成が思想界のテーマになったのは一九二〇年代のことである。阿部次郎の人格主義がそれを代表している。キリスト者であった賀川豊彦も人格社会主義をとなえて、人格の完成を社会主義の目的にすえた。一九二〇年代はカント哲学が流行した時代であり、人格の成長は大正デモクラシーの思潮を代表する

概念になった。なかでも阿部次郎の『三太郎の日記』は二〇年代の思想を代表する著作である。阿部次郎は人格の成長をとえ、その思想をまとめた『人格主義』の出たのが一九二二年であった。だが、わたしがここで読者の注目をうながしたいのは、阿部次郎が職業的な経済活動をあまり重視していないことである。阿部はいわばストア派的な立場に立った。この点は阿部が私淑した夏目漱石につうじるところである。

以下は別のところに書いたことと重複するのだが、人格主義の内容を確認しておこう。『人格主義』のなかで、阿部は社会には三つの類型があると論じている。第一は「主人と奴隷との社会」、すなわち権力という強制的要素によって編成されている社会であり、第二は「利己的約束の社会」、すなわち成員の利己主義によって自然につくられた社会である。そして第三が「人格主義的根拠の上に立っている」社会である。

第一の「主人と奴隷との社会」では、支配階級は利己主義によって、被支配階級は恐怖や打算によって服従している。このタイプの社会は強者の力が衰えたときにはたちまち分解してしまう。いつ崩壊するかわからない不安定な社会である。第二の「利己的約束の社会」は、利害の一致が団結のかなめをなしている。いわばヘーゲルのいう市民社会である。共通の利害によって結ばれた社会は内部の矛盾が小さいから、「主人と奴隷との社会」にくらべて団結力は強い。今日の社会において主流をなしているのは第二のタイプの社会だと阿部は言う。しかし利害は有為転変するものであるから、第二のタイプの社会もやはりしつかりした基盤に立っているわけではない。

これに対して第三の「人格主義的根拠の上に立っている」社会は自由な人格の相互尊重の上に立つ社会である。第一の社会と第二の社会は利己主義の上に立っている。だから利害が一致しないとき、社会は分解する危険がある。第三の社会ではすべての人が真善美聖という高い価値を追求しており、利害の一致不一致によって結合をさまたげられ

ることはない。独立した人格と人格の相互の尊敬と愛を基礎としてゐる。だから安定した基盤に立っている。⁽²⁰⁾

阿部次郎は以上のように書いてゐる。職業生活が人格の完成にとって重要なものとは考えてゐないことがわかる。職業生活を動機づけているのは利害関係だが、阿部によれば、利害関係によって人格が成長することはない。人間は自己の利害を乗り越えてこそ成長するのだと阿部は考えてゐた。だから阿部は、第三の社会の担い手を、「君主人」と呼んでいる。「君主人」とは哲学者リップスのことばに由来するもので、真に自由な人格、すなわち欲情に屈服せず、自己の人格の陶冶をめざして、真善美聖の実現をめざして行動するものことである。

阿部次郎ら新カント派の哲学者はさかんに人格の成長を論じたが、職業活動にいそむことが人格の完成につながるとは考えなかつた。人格の完成を導くのは真善美聖の追求なのである。真善美聖を追求しようとしたら、芸術家とか学者とか宗教家といった一握りの人たちは別としても、ほとんどの人は職業生活とは無縁の領域に身をおかなければならないだろう。しかし職業活動が人格の完成とは無関係としたら、人格の完成はたちまち貧弱な概念にならざるをえないであろう。さもなければ、一握りの「君主人」でなければ達成できないような非常に困難な事業になつてしまふであろう。

阿部次郎の影響を受け、人格の完成を理論の中心にすえたのが河合榮二郎である。河合榮二郎は、だれにでも人格の完成をめざす権利があるという視点によつて、阿部次郎の限界を克服した。河合榮二郎は学生に対してこそ教養主義的な人格完成を説いたが、社会政策をとなえるときの河合には阿部次郎のような文化主義的な偏向はない。河合榮二郎は、社会が人びとの人格完成を阻害することがはなはだしくなつたときには、国家が社会のゆがみを正すために介入するべきであるとした。人格完成ということばは、ここでは知的能力の高低を問わず、職業の如何を問わず、す

べての人に当てはまるものとして定義されている。ここで重要なことは、だれにでも人格の完成があるということである。人格完成ということばを使っているが、わたしの用語法では自己実現である。

思想の分野で、河合榮二郎が阿部次郎を乗り越えたのとおなじことを、文学の分野では大衆小説が成し遂げた。普通の人たちの自己実現の姿を具体的に肉づけしたのは大衆文学だった。夏目漱石は職業生活に背を向けた「高等遊民」を好んでえがいたが、白井喬二が取り上げたのは、大工、築城家、独楽づくり、経木屋などであった。全国に名をとどろかす著名な天才ではなく、丁稚奉公から身をたて、ひたむきに仕事に精進し、やがて年経て、その道についての深い境地に達するといった、そういう人びとを、白井喬二はえがいた。この人びとは、高い教養があるわけでもなければ、人格者であるわけでもない。意識して人格の成長をめざしているわけでもなく、ただ意地や、競争心や、のっぴきならない利害対立に導かれているだけである。白井が生み出した人物たちばかりではない。のっそり十兵衛も、天狗屋久吉も、悉皆屋康吉も、考えてみると立派な人格者だとはお世辞にもいえない。哲学はもとより、漱石や阿部次郎が重んじた文学や書画の教養があるともとても思えない。

大衆文学の世界で人格修養にむかっているのは、吉川英治の『宮本武蔵』くらいであったが、宮本武蔵はものづくりの人ではない。人を斬るという破壊の世界に身をおくからこそ、宮本武蔵は修養の人になる。それは古来文学のテーマであった英雄物語の範囲におさまるのである。

ものづくりの世界で活躍しているのは、普通の人間である。しかし、そういう普通の人間であっても、ひとつのことに打ち込み、自分の能力 (capability) を磨き上げ、自分が歩いてきた道に矜持をいだいている。そういう人は、尊

敬すべきなのである。島木健作の『生活の探求』の主人公は、革命運動に疑念を抱き、帰郷して父の農作業を手伝ううちに、似たような心境に達する。農民たちは無教養だが、先祖から受けついできた農業の技術には深い知恵がたたえられていることを体で知り、主人公は農民に敬意を覚えるようになるのである。

そろそろこの稿を結びたい。

一九三七年に日中全面戦争がはじまってから、自己実現がしばしば文学のテーマになるようになったと述べたが、実際のところ、高度国防国家の建設がさげばれ、総力戦体制づくりが現実のものとなり、年を追って物資の欠乏が深刻になると平行して、あたかもそれにあぶりだされるかのようにして、自己実現の思想は、文学ばかりでなく、思想の世界にも、社会科学の世界にも、姿をあらわすようになる。軍人が先頭に立って、すべての国民に対して国家への献身を強要するようになったとき、その対極にある普通の人間の自己実現を光の中に押し出そうとする力が文学者や思想家や社会学者をうごかしたのである。わたしが生産力理論と島木健作の文学に共通性をみると述べたのも、それゆえのことである。

仏教哲学者の鈴木大拙は『日本的靈性』（一九四四年）のなかで、佐渡に追放された親鸞がどんな生活をしたかを想像し、驚くべきことに、田畑を耕して生活したに違いないという結論に達している。農業を営んだに違いないというのである。そして額に汗して働くよろこびを経験した親鸞は、新しい悟りを見いだしたのだというのである。『日本の靈性』の主題は鎌倉仏教であり、禅と念仏である。鈴木大拙は、漁師のように殺生をこととする罪深い衆生も極楽に往生できるのだという浄土思想の意味をあきらかにしたり、日常の仕事のなかでひたすら念仏を唱えることが信心

なのだとする在俗の妙好人の生き方の意義をあきらかにしたりしている。

仏教にはきびしい殺生戒がある。殺生を犯すものは極楽に往生できない。仏教は人間を聖なる世界に生きるものと俗世に生きるものにわけて、殺生戒を守る僧侶には土地のなかの虫けらを殺すからという理由で田畑を耕すことを禁じ、世俗の人びとの喜捨によって生きるべきことを教えた。しかしそれはおかしいのではないかと鈴木大拙は考えた。聖なる世界に生きる一握りの人が極楽往生するために、大多数の人が殺生をおかさなければならぬというのでは仏の大慈大悲にかなわないのではないか。そういうわけで流刑の親鸞は自分で田畑を耕したにちがいないというのである。

自己実現と民主主義はかならずしも不可分に結合しているわけではない。まして戦争に対する批判にまっすぐつながるでもない。しかし自己実現は政治が依って立つべき基礎理念をこのうえなくはつきりと浮かび上がらせる。自己実現は一握りの人間にだけ開かれた道ではない。良き生き方は人によってさまざまである。それを政治は大切にしなければならぬ。白井喬二はものづくりを玄妙な営為にしてあげることで、自己実現に向けて人びとの注目をいざなったのである。⁽²¹⁾

(1) 自己実現の概念を提唱した心理学者のアブラハム・マズローは、人間の心の健全な発達を論じることは心理学ではなく宗教や倫理学の課題だったが、宗教も倫理学も普通の人が超えることのできないような高い目標をかかげてきた、専業主婦の生き方を選ぶ人にも自己実現はあるとして、そういう観点から自己実現の概念を提唱した。アブラハム・マズロー『完全なる人間 魂のめざすもの』上田吉一訳、誠信書房、一九六四年。

(2) 『婦人改造の基礎的考察』『定本與謝野晶子全集・第一七卷』講談社、一九八〇年所収。なお広岡守穂『ジェンダーと自己

実現」有信堂、二〇一五年、一六九頁および一八〇頁を参照されたい。

- (3) 賀川豊彦は『自由組合論』（一九二二年）で、人格主義を批判して次のように述べている。「資本家も青白い顔をした哲人もよく聞け、労働者は『生』を要求して居るのだ。生の付録を要求して居るのでは無い。自由を要求して居るのだ。文化を要求して居るのではない」（引用は『賀川豊彦全集・第一巻』キリスト新聞社、一九六三年、一八頁）。

- (4) 本稿でわたしは、人格の完成と自己実現を区別して使うこととする。たいていの場合、人格の完成と自己実現は区別する必要はないが、子細にみると論者によってかなり違いがある。人格の完成という場合、直接に意味するのは、道徳や感受性や知見が深くなることである。その場合、人格の完成に至る道筋は、しばしば商売をしたりあくせく働いたりすることとは無関係のものとしてみられる。したがって人格の完成を実現するのは、商取引や商品生産の現場から離れた人にかぎられる。他方、自己実現は、自分の潜在能力のひとつまたはいくつかを發展させて、生きることを意味している。その場合の潜在能力は、道徳や感受性や知見にかぎられない。やさしさであったり、コミュニケーションが巧みだったり、運動能力が高いこととであったりする。自己実現はだれにでも開かれた生き方なのである。

- (5) 高木健夫は「かれの作品が読者の人気を呼んで部数を増やしたものに、『サンデー毎日』に大正一三年五月から連載した「新撰組」がある。『サンデー』は、この時はじめてこの小説を巻頭においたのが、これによって部数がふえたので、それまで迷っていた週刊誌の将来の方針が確立したといつて、時の編集長石割松太郎が作者に感謝した、という」と書いている（高木健夫『新聞小説史 昭和編Ⅰ』国書刊行会、一九八一年、一三四頁）。

- (6) 白井喬二『さらば富士に立つ影』六興出版、一九八三年、一三〇頁。

- (7) 同右、三〇一頁。

- (8) 『碧瑠璃園全集・第六巻 荒木又右衛門』碧瑠璃園全集刊行会、一九二九年。『荒木又右衛門』は一九〇七年から翌年にかけて『大阪朝日新聞』に連載された。渡辺霞亭は『大阪朝日新聞』の小説欄を背負って立った記者で、碧瑠璃園、緑園生などの筆名で歴史ものを量産した。霞亭の歴史物は調べがいきとどいていたといわれるが、『荒木又右衛門』には塚原ト伝が又右衛門に剣の稽古をつける場面が出てくる。塚原ト伝は戦国時代の人であり、又右衛門が生きたのは一七世紀前半であるから、これはまったくのつくりばなしである。

- (9) 吉野孝雄『文学報国会の時代』河出書房新社、二〇〇八年、三五頁。

- (10) 山崎國紀『知られざる文豪 直木三十五』ミネルヴァ書房、二〇一四年、三四三～三四七頁。
- (11) ちなみに三田村鳶魚の大衆小説批判はしばしばその点に及んでいた。
- (12) 一九六七年には『日本逸話大辞典』が、やはり白井の監修で人物往来社から出ている。
- (13) 白井喬二『さらば富士に立つ影』一五二頁。
- (14) 同右、一五二頁。
- (15) 同右、一一七頁。
- (16) 同右、一三〇頁。
- (17) 同右、二六三頁。
- (18) 「小説と歴史の区別」白井喬二・国民文学研究会編『大衆文学の論業 此峰録』河出書房、一九六七年、一五九～一六〇頁。
- (19) 一九〇五年から六年にかけて小栗風葉の『青春』が『読売新聞』に連載された。主人公の関欽哉はルージンをモデルにしている。
- (20) 詳しくは広岡守穂『市民社会と自己実現』有信堂、二〇一三年を参照されたい。
- (21) だがなにより印象的なのは、一九三〇年代の大衆小説で、女性のえがき方が大きく変わったことである。山本有三は『女の一生』で女医として生きるシングルマザーをえがき、川口松太郎は『鶴八鶴次郎』で芸事に打ち込む女性をえがき、『愛染かつら』では愛する人に求婚されて、歌手として立派になるまで待つてほしいと語る子連れの寡婦をえがいた。民主主義との関係でいえば、通俗小説のほうがはるかに重要である。とはいえそれは大きなテーマである。通俗小説については稿を改めて論じることしたい。

(本学法学部教授)